

『秋のわかれ』と中興期京俳壇

附、蕪村発句「朝風に」のこと

竹内 千代子（英知大学文学部助教授）

住所 京都市中京区壬生馬場町16-11 粟田方

一

京都府舞鶴市郷土資料館に、故糸井仙之助氏旧蔵の文庫がある。その糸井文庫は、丹後俳壇の様相を知り得る貴重な俳諧資料を藏する。そのうちの一冊である『秋のわかれ』（改訂版丹後郷土資料目録）の分類番号（十、イ、5）については、すでに解題と翻刻とを本誌四号で紹介した^①。本稿では、それをふまえつつ中興期（明和・安永・天明頃）の丹後俳壇と京俳壇との関連を考察する。

先の解題で既に述べたのであるが、論述の都合上、書誌事項を簡潔に記すと、『秋のわかれ』は、丹後宮津の俳人である木下百尾が編纂した季友の追善集である。半紙本一冊、墨付十八丁。安永六年九月、自序。「洛陽書林橋屋治兵衛梓行」の刊記を持つ。季友は、与謝蕪村との交遊も知られる真照寺住職の鷺十らと共に丹後俳壇の中心的な存在であった。そして、鷺十の俳諧の実質的後継者である百尾は、丹後俳壇を支える一人である。

最初に、季友と編者の百尾とについて記しておく。

季友は、藤田氏か^②。別号に千鳥庵。宮津宮本町住。紺屋業。安永六年七月八日没。明和・安永期に俳諧活動が盛んで、丹後俳壇の中

心的な人物の一人。

百尾は、木下氏^④。別号に橋中亭。湊屋五兵衛。法名一叟了白庵主。宮津住。酒造業。寛政十年六月二十五日没。国清寺に葬られる（現在は確認できない）。明和から寛政期にかけての俳諧活動が盛んで、丹後俳壇の中心的な人物の一人。鷺十の俳諧の実質的後継者。寛政十二年四月（跋）には、百尾の追善集『二季のつゆ』が刊行された^⑤。

『秋のわかれ』は、初めに季友の発句をあげ、次に蝶夢の句を發句とする宮津連中による追悼歌仙をあげ、さらに丹後俳壇及び諸国からの追悼句を収載する。

季友は、蝶夢にして「身は市中に在ながら、心を風雲流水にを」き「たゞならぬ風雅のすきもの」と評された。その句を幾つか見ておくと、

ほし合や下ははかなき飛鳥川

この巻頭にあげられた句は、「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」（古今和歌集）をふまえ、無常觀を表出した雅趣のある句作りであり、雅語を基調とした穏やかな句調である。概ね淡泊で上質な詩質を持っているものと評されよう。また、次の句は、比喩表現がみずみずしく、語感が鋭い。

明月や黄金を削る葉の零
白雲に身はうづもれて葉ほり

海士の火にすかして寒し波がしら

また、次の句は、飄逸なおかしみがあり、ほのぼのとした人柄も忍ばれる。

隣ともしらで来て居る瓢かな

けふの雛われも馬乗人形かな

ここで、『秋のわかれ』が刊行された明和・安永・天明期の丹後俳壇を概観しておく。俳諧は、右で述べた季友のそれと同様に概ね雅趣のある穏やかな句作りが主調で、この時期は宮津を中心に発展していく。このことは、宮津俳人による俳書の編纂・刊行状況や、京都を中心とする中央俳壇との繋がりからも知られる。宮津の連衆は、京都俳壇の蝶夢や蕪村らとの関係をもちながら、墨直し会、時雨会といった芭蕉顕彰事業との関わりなどへと展開させていった。また

一方で注目に値するのは、丹後田辺（加佐郡舞鶴町）を中心とした連衆で、宮津連衆とは別に京都の千載堂丈石との繋がりを持ち、蝶夢とは活動を異にする俳諧を展開させていたことである。次に詳述する。

まず、明和・安永・天明期の宮津を中心とした連衆を地域ごとにあげ、さらに同地の連衆による俳書の編纂・刊行状況をみる。

- 宮津（与謝郡） 鷺十、竹溪、季友、文設、馬吹、斗杯、東陌、陵巴、建山、百尾、起竜、南畝、竹圃、梅夫、桃溪、吟松、東面、米珠、兎乘、者三、木父、些紅、阿誰、跨山、野涼、陌（白）児、之芳、甫尺、路景、其翠、麦士、鳥郷、這乙、知風、季月、花友、桂夫、謝石、山呼、李郷、閣右、東渚、乙舟、其水

(五)

○岩瀧（与謝郡） 友枝、浦曲、芝月、夏炉、鼎二、渭柳、磨牛、一紅、文鯉

柳雪、建之、扇里、岐山、似扇、貫洛、里牧、尺布

○河守（加佐郡） 杜中、亀憩、春設、有中、桑五、木越、器一、

○田辺（加佐郡舞鶴町） 垂耳、柳靡、踏青、柳里、壺天、梅里、旭布

○湊・日間浦（熊野郡） 支白、昌竿、簡今、八斗、西仙、荷休、丘明、

○久美浜（熊野郡） 素井、清虚、以文

○甲山（熊野郡） 風草、松住

○峰山（中郡） 其陌（白）、其輪、丘園、逸枝、いそ、もよ、

○網野（竹野郡） 鶩舟、一溪、秋月、玉兔、机睡、袖墨、吐雲、

三思、将白、露撥、兎眠、

なお、右の□は、後述する丈石との関係をもつ人々である。
左には、俳書の編纂・刊行状況を見る。

○鷺十編『橋立の秋』（明和三年九月序）

○東陌編『一聲塚』（明和四年十月十二日序）

○米珠編『経ヶ崎之記』（明和四年四月末序）

○百尾編『秋のわかれ』（安永六年九月序）

○馬吹編『丹後の名寄』（安永九年冬序）

○東陌編『浦の月』（天明元年八月序）

○白児著『白児独吟十百韻』（天明五年六月十二日興行）

○木越編『湯島翁記』（天明六年十月十二日興行）など。

管見の範囲ではあるが、このように木越を除いた他は宮津の俳人であり、宮津俳壇は、この後の文化年間頃まで、丹後俳壇の主勢力で

あつたと見られる。田辺の木越も初期においては宮津俳壇との関わりの方が深い。しかし、木越が活躍した天明年間以後は、次第に田辺俳壇が勢力を伸長し、丹後俳壇の主勢力となっていくのである。

木越は、丈石に繋がる田辺連中とも交わっていくのである。木越は、丈石に繋がる田辺連中とも交わっていくのである。さらに、木越は、丈石に繋がる田辺連中とも交わっていくのである。木越は、丈石に繋がる田辺連中とも交わっていくのである。

次に、明和・安永・天明期の丈石との関係を持った連衆を地域ごとにまとめてあげる。丈石は京都の人で、俳諧は知石門、貞門の主張を鼓吹した。安永八年に八十五歳で没するが、丹後俳壇との関係は代々の千載堂丈可・丈士・貞士に引き継がれる。

○田辺

(加佐郡舞鶴町)

龜憩、常軻、可隨、錦枝、可欣、和吹、沙長、
浦夕、池月、月波、呂人、可友、有中、友月、
江籬、柳靡、丈里、桑五、荷休、十雨、踏青、

杏里、東塙、如塙、百之、牛里、優里、如扇、
春浦、拾翠、鶯十、木越

○河守 (加佐郡)

採花、蒼々、羅暉、百船

○北有路 (加佐郡)

始皓、路逸

○日置 (与謝郡)

瑞之

○栗田 (与謝郡)

柳吹、乱鬢、江雲、

○加悦 (与謝郡)

岐山、如矢、長加、

○宮津 (与謝郡)

烏雪、

このように、田辺を中心とした連衆とは、活動を異にする。しかし、宮津連中の交流は認められ、□を付した連衆が他との連衆とを繋ぐ役割を担っていたものと思われる。

以下には、「秋のわかれ」と関わっている中川蝶夢、井上重厚、与謝蕪村、高桑闇更について、京都俳壇との関連を中心に述べていくこととする。

二

中川蝶夢は、季友追善集の「秋のわかれ」の成立に関わって、丹後に赴き、土地の有力俳人である鷺十、百尾、馬吹、東陌、山呼らと追善の歌仙を巻き、発句を詠んでいる。この頃の丹後俳壇は、蝶夢を通して京俳壇に繋がっていた。蝶夢が、京都の京極に住まいしたり、東山の岡崎に五升庵を構えて、「墨直し」会や京都での芭蕉忌を主催していた頃である。蝶夢は、それらの芭蕉顕彰事業を為すにあたり、より多くの地方俳人の賛同と経済援助とを必要とし、丹後俳壇とは、明和三年(三十五歳)^④以前から交渉を持ち、終生変わることがなかった。因みに、「秋のわかれ」には、京都をはじめとして諸国から、追善の句が寄せられている。京都の重厚・諸九、但馬の木卯、伊賀の桐雨・浮流、備後の古声、筑後の其両、陸奥の巨石など、蝶夢と親交の厚い人々である。

ところで、蝶夢と丹後俳壇との関わりは、先に鷺十編「橋立の秋^⑤」に見られる。同書は、明和三年に蝶夢が、鷺十を訪問した折りの記念集である。丹後の連中との三歌仙を收め、橋立の吟としては、故人の貞室・素堂・支考・百川・雲裡・文素に次いで、蕪村の入集が注目に値する。まず、三歌仙興行の連衆を記す。

○「待宵や」歌仙連衆 蝶夢・鷺十・竹溪・季友・宜甫・文設・馬吹・斗杯・文下。

○「明月や」歌仙連衆 蝶夢・東陌・建山・陵巴・文下・宜甫・起竜・百尾・竹圃・南畠・梅夫。

○「見渡すも」歌仙連衆 蝶夢・友枝・浦曲・渭柳・芝月・鼎一・夏炉・有中。

ここからは、鷺十・竹溪・東陌・百尾を中心とした丹後俳壇の縮図

が見て取れる。ここに出座している多くが、次に記す蝶夢が主催した『墨直し』や芭蕉忌にもその名を連ねている。

ここで、蝶夢が主催した『墨直し』と、蝶夢が京都で主催して『しぐれ会』に入集した芭蕉忌とのそれぞれについて見ておく。『墨直し』の最初は、各務支考が、宝永七年三月十二日、洛東の双林寺に芭蕉の仮名の石碑を建て、翌年の同じ日に碑面の文字に新たに墨を加える式の俳諧興行を記念して編んだものである。以後、この行事は継承され、撰集『墨直し』も刊行されている。それらは大局的には、支考に繋がる美濃派の連中によつて主催されていく。その流れのなかで、蝶夢は、明和二年から同七年三月十二日の興行を双林寺閑阿弥亭で主催しているのである。美濃派に特に傾倒しない蝶夢が、京の美濃派に重きを置かれていた子鳳や麦林系傍流の不二庵二柳を通じて『墨直し』を主催し、また、次第に蕉風復興の性格を強めていったために『墨直し』から引かなければならなくなつたといふ事情については、田中道雄氏の論考に詳しい⁽⁹⁾。また、蝶夢が『墨直し』を主催し得た理由のひとつは、その主催者が、京都の双林寺に居住しておらず、「墨直し」の会の度毎に集まつたということであろう。毎年、会を開き撰集を刊行するには、多くの時間・労力・金銭と意欲とが必要である。その隙間に入り込んだのが、蝶夢であつた⁽¹⁰⁾。

また、『しぐれ会』は、例年芭蕉忌の十月十二日、近江国膳所の義仲寺で行なわれる法要の俳諧興行を収録したものである。文素が芭蕉七十回忌の宝暦十三年に始め、蝶夢らに継承されていく。その拠点は芭蕉の墓のある近江の義仲寺であるが、蝶夢は京都京極中川の庵並びに、東山岡崎の五升庵に居て『しぐれ会』の事業を扶けた。蝶夢は、義仲寺の芭蕉忌に先立つて京都でも芭蕉忌の俳諧興行を主催し、それを義仲寺の興行と並べて『しぐれ会』に収めている。そ

れは、明和五年から安永二年十月八日のことである。⁽¹¹⁾なお、それ以降、京都での芭蕉忌興行はなくなり、十月十二日の義仲寺しぐれ会興行のみとなる。このころには、近江の「時雨会」も知名度が高くなつていただろう。

安永三年以降の丹後俳人の入集状況を概観すると、文化年間まで若干の増減はあるもののおおよそ毎年入集している⁽¹²⁾。丹後俳壇は、京都という地の縁だけでなく、蝶夢を通じての活動をも取り込んでいたと言えよう。以下に『墨直し』と『しぐれ会』とに入集している丹後俳人の状況を一覧しておく。『墨直し』については、蝶夢が主催した明和二年から同七年まで。『しぐれ会』については、蝶夢が主催した明和五年から安永八年まで（ただし、安永七年は沂風主催）。なお、重複している明和五年から七年までの入集者には□を施した。

○『墨直し』

明和二 入集者なし

明和三 宮津竹溪、以上出座。

明和四 宮津米珠・麦士・何誰・鷺十・文設・建山・季友・東面・

馬吹・竹園・南畝・百尾・斗杯・梅夫・鳥郷・沛泉・兎乗・

者三・木父・這乙・知風・季月・花友・東陌・^{岩瀬}浦曲・

鼎二・芝月・渭柳、以上文通。

明和五 何誰・季友・之芳・芝月、以上出座。 静芳・麦士・百尾・

馬吹・南畝・竹園・東陌・鼎二・黔首・文泉・^{岩瀬}風草、以上文通。

明和六 宮津其翠・^{岩瀬}浦曲、以上出座。 宮津季友・百尾・馬吹・竹園・

鶯舟・露撥・兎眠・棹歌、以上文通。

明和七 耳考、以上出座。 季友・其翠・風草・文泉、以上文通。

○『しぐれ会』

明和五 鶩十・麦土・季友・百尾・馬吹・南畠・竹圃・其翠・簡兮・

風草・浦曲・鼎二、以上文通。

明和六

文泉・風草・季友、以上文通。

明和七

文泉・何誰・其翠・陌兒、以上文通。

明和八

文泉・季友、以上文通。

安永元

宮津季友・馬吹・乙舟、以上文通。

安永二

宮津百尾・季友・馬吹・山呼・河守尺布・岩瀬芝月・峯山其輪・

八百洞・丘園・逸枝・いそ・三思・淡支白・清虛・田辺垂耳、
以上文通。

安永五

嵐山其陌・将白・其椎・逸枝・女もよ・木越・桑五・

安永六

入集者なし

安永七

田辺木越・桑五・宮津百尾・馬吹・跨山・山呼・路景、以上文
通。

安永八

田辺木越・桑五、以上文通。

安永九

田辺木越・桑五、以上文通。

安永十

田辺木越・桑五、以上文通。

蝶夢

は、既に全国に知られていた「墨直し」会の事業で諸国の俳
人との交際の礎を築き、次に、ほぼ時を同じくして京都の芭蕉忌を

近江義仲寺の十一月十二日に先立つて十一月八日に執り行い、蕉風
復興の気運を補強した。さらに、京都の芭蕉忌の俳諧興行を義仲寺
の「しぐれ」に収録し、諸国俳人の関心を義仲寺の「時雨会」に定
着させた。そのなかで丹後の俳人が担う部分は大きいのである。右
の一覧には重複する者に□を施したが、先に「墨直し」の入集が
あり、続いて芭蕉忌へと入集した人々である。蝶夢の「墨直し」会
が終止符を打つても丹後俳人との交渉は続く。この状況は、「時雨会」

が、知名度の高い「墨直し」会に劣らぬ知名度を持ち得たことを意

味し、その定着を示すものである。そのことは、安永三年以降も、『しぐれ会』に毎年のように入集していることからも知られる。蝶夢

の蕉風復興事業の思惑は大いに当たつたのである。

丹後俳壇の内情からすれば、まず中央である京都俳壇に繋がつて
いることが重要であった。そして、実績を積み、知名度も伸長した
義仲寺の「時雨会」に繋がることは、京都俳壇に繋がることと匹敵
すると認識した。安永六年刊の「秋のわかれ」に先立つて季友・百
尾ら丹後の俳壇と蝶夢とは密接に繋がっていたし、それ以後も交際
は続いていく。蝶夢にとつてもまた、芭蕉顕彰事業を為すにあたつ
ては、多くの地方俳人とその経済援助とが必要であったが、丹後俳
壇は有力な地方俳壇の一つであつたと言えよう。

三

井上重厚は、『秋のわかれ』の「諸国各詠」の筆頭に置かれている。

重厚は蝶夢の高弟であり、明和七年に去來の落柿舎を再興し、京都
俳壇に重要な位置を占めていたからであろう。重厚と丹後俳壇との
繋がりは、蝶夢ほどには強くないが、百尾との交際が注目に値する。

その井上重厚の発句は、

足のべて寝るや月夜のはしり舟

諸國重厚

である。『秋のわかれ』が刊行された安永六年の秋、重厚は長崎や筑
前を旅行中のことであった。同年夏、中国筋に遊ぶ諸九に会い、そ
の後、九州に赴き、筑前の其両に会っている。諸九も其両も『秋の
わかれ』に入集している。この頃の重厚は、嵯峨に落柿舎を再興し
たが、旅に遊ぶことの方が多いかった。

重厚と丹後俳壇との交際は、師の蝶夢を通じてからのことである。

ここで、重厚が編集している俳書から、丹後俳人の入集状況を見ておく。因みに、重厚が落柿舎を再興した記念集である明和八年九月興行の『去来忌』には、丹後俳人の入集は見られない。

○天明六年四月刊『句双紙』

：百尾・支白・其白・木越発句一入集

○天明六年八月刊『うら不二』

：支白・逸枝発句一入集

○天明七年夏序『乞食ぶくろ』

：百尾発句一入集

○寛政元年秋から同三年冬執筆『其梅』

：如毛発句一入集

○寛政六年九月刊『祖翁百回忌』（寛政五年時雨会奉納）

：百尾・馬吹・跨山・寒口・一声・裸木・木越・旭布・桑五・金山・未正・加冬・杏里・柳靡・梅居・尺布・弥芳・始皓・李鳥・雲蝶発句一入集

次に、丹後俳人による撰集から、重厚の入集状況をみておく。

○天明元年八月序、馬吹編『浦の月』（東陌追善集）

：重厚発句一入集

○寛政二年十月十二日序、白児編『一聲塚百廻忌』

：近江重厚発句一入集

○寛政四年序、跨山編『鷺十上人発句集』

：重厚発句一入集

○寛政五年興行、木越等編『烏塚百回忌』

：重厚発句一入集

○寛政十二年四月跋、東几・己千編『三季のつゆ』

四

また、重厚は百尾の「俳人墨蹟帖」に句を書き留めている。その句は、

象潟のうつゝにひるの水鶴かな 重厚

である。この句は、寛政元年に編集された春坡編『小鳥』に入集している。¹⁵ただし、「俳人墨蹟帖」の筆跡は、寛政五・六年頃のものであろうと思われる。このころに重厚が丹後へ旅行した形跡は見当らないので、寛政五年の芭蕉百回忌の折りに百尾が上京し、揮毫を求められたものかもしれない。

（五六）

た形跡が見当らない。重厚は、明和七年に京都嵯峨に落柿舎を再興するが、明和末年にはすでに旅に出ることが多く、天明六年には江戸へ、寛政四年には近江の義仲寺へ居住し、京都からは離れてしまったからであろうか。¹⁴ただ、寛政十年に没する百尾と文化元年に没する重厚とは俳諧活動期が重なり、鷺十と蝶夢との縁を継承しているようである。

また、重厚は丹後俳人の「俳人墨蹟帖」に句を書き留めている。その句は、

象潟のうつゝにひるの水鶴かな 重厚

である。この句は、寛政元年に編集された春坡編『小鳥』に入集している。¹⁵ただし、「俳人墨蹟帖」の筆跡は、寛政五・六年頃のものであろうと思われる。このころに重厚が丹後へ旅行した形跡は見当らないので、寛政五年の芭蕉百回忌の折りに百尾が上京し、揮毫を求められたものかもしれない。

蕪村の入集句は、

朝風の吹きましたる鵜川哉

である。同句は、「高徳院発句会」によると、明和八年五月十六日、東寺奥の坊での句会時に、「鵜」の兼題で詠まれたものである。初句は「朝風に」であつたが、それを「朝風の」と改めたのは、安永六年五月二十三日几董（推定）宛蕪村書簡中⁽¹⁷⁾であつた。これらは周知のことであるが、興味深いのは、書簡中に、「花茨故郷の路に似たる哉」以下七句を記し、「花茨」の句が両吟の発句として最適だろうといい、そして、

外には、朝風の鵜河よろしく候

と、「朝風の」の発句で歌仙を巻く可能性を示唆するものであつたことである。因みに、現在のところ「花茨」と「朝風の」とを発句とした歌仙は知られていない。「花茨」の句は、自筆句帳に書き留められたり維駒編『五車反故』に入集するなど、佳句の一つとして現在に至つている。一方、「朝風の」の句は、自筆句帳に書き留められることなく、蕪村が推敲の末の自信を以て示した句であるにもかかわらず、その存在感は希薄である。しかし、安永六年五月二十三日の後、日を置かずして、同年七月八日に没した季友の追悼句集に書き送つた。その際の蕪村の心境は、並々ならぬものであつたことが察せられる。すなわち、蕪村は、丹後の地を大切に思つていたのである。

蕪村が丹後の宮津に出向いたのは、宝暦四年夏のことである。同七年秋までの三年余を滞在し、多くの画作を残している。淨土宗見性寺の蝕薗、俳号竹渓のもとに寄寓し、まもなく真昭寺の惠乘、俳号鷺十や無縁寺輪薗、俳号両巴らと交わる。彼らとの友好は深く、竹渓・鷺十・両巴を描いた「三俳僧図」⁽¹⁸⁾は著名である。また、俳諧では、鷺十編『橋立の秋』に橋立の一句を入集したり、俳諧興行に出座している。それらには、

○宝暦五年五月二十八日「橋立や」興行。連衆は、雲裡・吟松・

蕪村・桂龍・竹渓・桃渓・鷺十・催馬・尺布・南波。

○宝暦六年三月宮津凝視亭「うぐひすや」興行。連衆は、桂龍・

吟松・蕪村・鷺十・建山・東陌・桃渓。

がある。⁽¹⁹⁾

蕪村と丹後との関わりの要点は、宝暦四年から同七年の丹後滞在と、鷺十を中心とする丹後俳壇との交わりとである。したがつて、「秋のわかれ」を編纂している百尾とは、蕪村の丹後滞在期間中に直接の交渉はなかつたようであるが、鷺十の俳諧の実質的後継者であることから交際が生じたものであろう。また、天明元年六月二十一日に没した宮津の東陌の追善集である「浦の月」（天明元年八月序、馬吹編）に蕪村が入集しているのも、彼が宮津に滞在していた時の交際によるものであろう。因みに、蕪村句は「文通四季発句」の巻頭で、

西ふけば東にたまる落葉かな

である。

他方、蕪村の編んだ俳書へ丹後の俳人が入集する例は少ない。天明二年刊『花鳥編』に、宮津の東渚・路景・山呼が入集しているのは稀な例である。⁽²⁰⁾このことは、蕪村が、自らの俳書を自らの俳諧を表出するためのものとして捉えていたからであると考えられる。蕪村は、安永五年に京都の金福寺内に芭蕉庵を再興し、俳諧興行を行なう。しかし、芭蕉を顕彰しながらも、蕪村にとつては自己の俳諧を提示するのが主眼であった。すなわち、蝶夢のように、蕉風復興をその中心に持つていて、芭蕉を顕彰するものは門派に問わらず広く受け入れるという捉え方と、蕪村は根本のところで違つたのである。

五

○芭蕉堂と花供養

「芭蕉堂」の項目に、

双林寺の境内、西行庵の西にいとなみしなり。

ここで、明和・安永・天明頃の京都俳壇及び近江の義仲寺の状況をみておく。

中興期の京俳壇は、次のような芭蕉顕彰事業が盛んであった。

○ 宝永七年三月十二日から続いている双林寺の墨直し会

(明和二年から同七年までは、蝶夢が主催)

○ 明和五年から安永二年まで、蝶夢が京都で執行した芭蕉忌

(ただし、宝暦十三年十月十二日から続いている義仲寺の芭蕉忌と関連した興行)

○ 明和七年に重厚が嵯峨に落柿舎を再興

○ ○ 安永五年に芭村が金福寺内に芭蕉庵を再興

○ 天明六年三月十二日から、闌更が双林寺に隣接する芭蕉堂に於いて花供養を営み、撰集を刊行

これらを主導したのが蝶夢、重厚、芭村、闌更であった。その盛況ぶりが記されているものに、天明七年秋に刊行された秋里籬島の『拾遺都名所図会²¹』がある。彼には先に、安永九年八月刊の『都名所図会²²』がある。わずか七年の後であるが、芭蕉顕彰事業は明和・安永・天明期に急速に進展して行き、拾遺の刊行にあたっては俳事を積極的に取り入れさせた。

籬島は京都にあって俳諧もよくし、俳諧作法書である『俳諧早作伝』を編集するなど、京俳壇との接触にも積極的であった。因みに、安永五年九月刊『俳諧早作伝』は、闌更が序文を記し、「故去来之胤平安落柿舎」即ち重厚が跋文を記している。かくの如く、籬島は、芭蕉顕彰事業に敏感であった。それらの成果を以下に『拾遺都名所図会』から拾い出してみる。

(五八)

○ 双林寺の墨直し会
双林寺のことは、『都名所図会』に「金玉山双林寺」として記載されている。その内容は、西行の庵・塔と彼を慕う頓阿の庵との記述のみである。すでに芭蕉の仮名塚があり、「墨直し」会も修されていてもかかわらず、芭蕉に言及するものではない。『拾遺都名所図会』に至つて、「芭蕉堂」の項目の「芭蕉翁の碑」に、

双林寺の内、西行の塔の側にあり。美濃の東華坊支考これを書して建てられしなり。毎歳三月十二日、墨直しといふことあり。獅子庵の支流廬元・呉竹・再和などの門派の人々、美濃より上洛して碑文の墨を修補し、当山において俳筵を催しけるなり。その碑文に曰く（略）

○ 芭蕉庵再興
とあり、碑文の全容を記す。

「金福寺」に並んで「芭蕉庵」の項目があり、
同所、後ろの丘にあり。ばせを翁、都往き來のとき、時々ここに

寄宿す。ゆゑに芭蕉庵と号す。年久しく頽廃せしを近年再興す。

事は、与謝蕪村が撰『写経社集』の序に見えたり。また、庵の北に芭翁の碑石あり。

と言い、碑文並びに、『写経社集』の序文をあげる。

○落柿舎再興

「落柿舎」の項目に、去來の『落柿舎日記』の一文を記し、近年、去來の支族俳士井上重厚、旧蹟に落柿舎を修補し、其傍に此句を石に鏤、ここに建てすまひし侍る。

と言う。その他、画中に和歌だけではなく俳句も多くなつており、俳諧に傾倒していることが知られる。

六

以上のように、芭翁の氣運が京都で盛り上がる明和・安永・

天明期に、丹後俳書の『秋のわかれ』は刊行された。『秋のわかれ』が、丹後俳壇の情勢を反映しているのは勿論のことであるが、そこに入集している俳人からは、中興期の京都俳壇の様相を窺うことができた。そして、丹後俳壇が求めた中央俳壇の後ろ盾として、「墨直し」会や京俳壇に匹敵するほどに伸張した「時雨会」があつた。また、中興期京俳壇のなかで、芭翁の事業は、地方の俳人とその経済力を基盤として成立しているという一面を持つが、『秋のわかれ』を排出した丹後俳壇もその一つであつた。特に、蝶夢の芭翁の事業にとつては、重要な位置を占め、義仲寺の「時雨会」の隆盛にも繋がつていつた。

さらには、後年、京の東山に移住した高桑闇更も、この時は未だ加賀住まいであつたが、

梅が香にしろき飯くふ世也けり

加賀闇更

の句を寄せており、丹後俳壇の交際の広さを示す一資料となつてゐる。闇更は、天明三年に京都東山に芭翁堂を創立し、天明六年三月十二日に芭翁追善会を修し、『花供養』を刊行する。同年の『花供養』には、田辺（加佐郡舞鶴）の木越と梅里のみが入集している。しかし、後年に丹後俳壇の連中は、この『花供養』を通じても京俳壇に繋がっていく。なお、丹後俳壇の内情から見ると、宮津連中よりも田辺・河守（加佐郡）の連中の方が積極的である。田辺の木越、河守の梅居、無諍などが注目に値する。⁽²³⁾

このように、『秋のわかれ』には、中興期の京俳壇を担う蝶夢、重厚、蕪村、闇更（ただし、後年）らと積極的に交渉を持ち、自分たちの俳壇を形成していこうという、丹後俳壇の縮図が見て取れるのである。

注

(1) 立命館大学アート・リサーチセンター紀要「アート・リサーチセンター」第4号所収の「秋のわかれ」解題と翻刻——江戸中期の丹後俳壇と京俳壇——(二〇〇四年三月発行)。

(2) 小室万吉（洗心）編『丹後俳人集』、昭和五年十二月発行、私家版に拠る。以下についても、同書を参考とした記述がある。

(3) 丹後俳人による俳書では、○鷺十編『橋立の秋』（明和三年序）、○米珠編『経ヶ崎之記』（明和四年序）、○東陌編『一聲塚』（明和四年序）などに入集。

他国俳人による俳書では、○巴笑編『かけはし集』（明和三年十月序）、○漁光編『ちどり塚』（明和五年夏跋）、○蝶夢編『墨直し』（明和四・五・六・七年三月十二日興行）、○蝶夢編『しぐれ会』（明和五・六・八・九・安永二・四年十月十二日）、○蝶夢編『施主名録発句集』（明

和七年三月十五日興行)、○百草園寒夫編『見かんこどり塚』(安永元年

四月十二日興行)、○蝶夢編『類題発句集』(安永三年刊)。○器水編

『蓑生浜』(明和四年刊)か、角川『俳文学大辞典』による)、○一音編

『さびしをり』(安永五年刊)、○斗醉編『春興』(安永五年奥)、○江涯

編『張瓢』(安永五年序)、○巨洲編『桐の影』(安永六年端)、○杏齋

『続寒菊』(安永九年奥)などに入集する。

(4) 注(2) と同じ。

(5) 丹後俳人による俳書では、○鷺十編『橋立の秋』(明和三年序)、○

米珠編『経ヶ崎之記』(明和四年序)、○東陌編『一声塚』(明和四年序)、

○東陌編『丹後の名寄』(安永九年序)、○馬吹編『浦の月』(天明元年

序)、○白児編『一声塚百廻忌』(寛政二年序)、○支潤編『はなのちり』

(寛政五年序)などに入集。

他国俳人による俳書では、○蝶夢編『墨直し』(明和四・五・六年三

月十二日興行)、○蝶夢他編『しぐれ会』(明和五・安永二・五・七・

天明三・六・寛政元・四年十月十二日興行)、○蝶夢編『施主名録発句

集』(明和七年三月十五日興行)、○蝶夢編『類題発句集』(安永三年刊)、

○蝶夢編『新類題発句集』(寛政五年刊)。○諸九編『湖白庵集』(明和

四年序)、○同『秋かぜの記』(明和九年序)。○一音編『さびしをり』

(安永五年刊)。○斗醉編『春興』(安永五年奥)。○江涯編『張瓢』(安

永五年序)、○古声編『山里塚』(安永八年序)。○江涯編『浪速住』

(天明元年序)。○重厚編『句双紙』(天明六年刊)、○重厚編『乞食ぶ

くろ』(天明七年序)、○木朶編『松葉塚』(寛政五年冬序)、○無諍編

『すず塚集』(寛政五年序)、○重厚編『祖翁百回忌』(寛政五年のしぐ

れ会に相当、寛政六年刊)。○桃路編『芭蕉翁百回忌華鳥風月』(寛政

二年跋)。○春坡編『小艸』(寛政五年刊)。○闡更編『花供養』(寛政

十年刊)等に入集する。

(6) 『二季のつゆ』は、百尾と山呼との両俳人の追善集である。百尾の子

の東几と山呼の子の己千の共編。序文は、方広及び、寛政十二年春に

馬吹が記す。跋文は、寛政十二年四月に跨山が記す。諸国からの入集

者には、故人の蝶夢・蕪村・几董・闡更らと、粟津の重厚、義仲寺の

祐昌らがいる。

(7) 明和三年九月序、鷺十編『橋立の秋』の交際による。

(8) 明和三年九月鷺十序。

(9) 佐賀大学教養部研究紀要第28巻「翻刻・蝶夢編『墨直し』六種」(一

九九六年三月発行)。

(10) 「墨直し」の刊行状況を一覧すると、題名を初めとして編集の体裁は、

不統一である。これは、美濃派ということで、支考、廬元坊、五竹坊、

再和坊、以再坊らの調整、協力などが行なわれていただろうが、双林

寺から主催者が遠く離れているということからくる統制力の弱さであ

る。主催者も、二年で変わることが多い。蝶夢主催の『墨直し』は、

六年間続き、統一観が見られ、安定している。

(11) 安永三年の『しぐれ会』については、所在不明のため未詳。

(12) 丹後俳人の『しぐれ会』への入集状況は、義仲寺編大内初夫監修

『時雨会集成』(平成五年十一月発行、非売品)に詳しい。同資料は、

天保五年までのものである。ただし、安永三年の『しぐれ会』につい

ては未詳。

(13) 百尾の『しぐれ会』への入集状況は、義仲寺編大内初夫監修『時雨

会集成』(平成五年十一月発行、非売品)に詳しい。

(14) 拙稿『井上重厚年譜稿』(関西大学国文学会「国文学」六十九号、平

成四年十二月発行) 参照。

(15) 寛政五年刊の重厚・春坡編『小鳥』に収められているが、同書の成

立は、寛政元年であり、該当の句の成立もこの頃と推定した。

(16) 集英社古典俳文学大系『蕪村集』、講談社『蕪村全集』などに拠る。

(17) 大谷篤蔵・藤田真一編、岩波文庫『蕪村書簡集』(一九九一年刊)に

拠る。

(18) 竹溪・鷺十・両(陵)巴の三僧を蕪村が描いたもの。京都府立丹後郷土資料館に寄託されている(二〇〇四年九月現在)。

(19) 宝暦五年五月二十八日の歌仙は「蕪村自筆句巻」に、宝暦六年三月の歌仙は「蕪村自筆稿本」に所収。講談社「蕪村全集一二」に収録。

(20) 蕪村没後になるが、天明四年几董編『から松葉』に路景・野耕が入集、天明三年維駒編『五車反古』に路景が入集している。その他に多くの用例が見いだせないのは、蕪村が諸国の俳人と広く交際を持つことをあまり望まず、その後継者の几董もそうであつたからであろう。

(21) 新修京都叢書第七巻による。本稿中では、「左青龍」「右白虎」の巻から引用する。適宜、濁点や句読点を付した。

(22) 新修京都叢書第六巻による。本稿中では、「左青龍」の巻から引用する。適宜、濁点や句読点を付した。

(23) 「花供養」は、闌更が主催した天明六年の三月十二日興行をその嚆矢とする。本稿と関連する明和・安永期とは時期が重ならないのであるが、参考として、天明六年から闌更が没する年の寛政十年までの間、「花供養」の丹後俳人の入集状況を見ると、宮津連中よりも田辺(舞鶴)の木越や河守の梅居らの活動が盛んであることを指摘しておく。また、闌更没後の丹後の俳人達は、歴代の「花供養」に多く入集している。中でも注目に値するのは、ずっと後年のことになるが、文久三年公成主催の「花供養」である。与謝の様溪が序文を記しており、経済的な援助も行なつていたものと推察される。